第３章　『玉塵抄』における引用文献

―『韻府群玉』との比較―

1.　はじめに

室町期の漢籍や仏典，また国書に対する講述書である抄物は，原典の理解のために，様々な文献を用いて漢字や漢語などの音や意味，用法を説明しているだけでなく，さらに独自に漢字の研究を広く押し進めている。そこで引用・参照している文献のほとんどが中国のものであることから，抄物は中世日本の学問の場で中国の文献がどのように受容され，そしてそれによってどのような漢字や漢語の研究がなされていたのかを知る上で，有力な資料となっている。

ところで数多い抄物の中で，惟高妙安(1480～1567)の手になる『玉塵抄』(1598)は，数多くの中国文献を利用して作られた元代の韻書『韻府群玉』(1334)の講述を行なっている点において特に注目される。本章では，この点に着目し，『玉塵抄』とその原典である『韻府群玉』を引用，あるいは参照されている文献(以下，両者を合わせて引用文献と呼ぶ)の面から比較して，『玉塵抄』の性格の一面を明らかにしてみたい。そのために，まず，『韻府群玉』と『玉塵抄』にはそれぞれどのような引用文献がどのくらい載せられているのか，また両者の引用文献はそれぞれどういう関係にあるのかを検討する。

次に，その検討を踏まえて引用文献の面から両者の性格を把握する。その後，惟高妙安が『玉塵抄』で独自に引いている文献の有無やその種類などを検討して，直接漢字研究と関わりのある字書や韻書がどのくらいあり，またどのくらい利用されているのか，つまり引用文献の中で字書や韻書がどのような位置を占めているのかを考察する。そして最後にこれらの検討の結果を踏まえて，漢字音研究資料としての『玉塵抄』の性格を明らかにしてみたい。

2.　引用文献の調査

『玉塵抄』は『韻府群玉』に載せられている二字，三字，あるいは四字の熟語の説明と，その熟語に付いている注を中心として講述を進めている。その説明や注における引用文献と『玉塵抄』のそれとを比べてみることによって，『玉塵抄』がどのくらい原典を忠実に反映しているのか，またはどのくらい原典と離れているのかを明らかにすることがある程度できるはずである。そこで，本節では，『韻府群玉』と『玉塵抄』の中で，それぞれどのような文献がどのくらい用いられているのかを調べて，『玉塵抄』は『韻府群玉』をどのくらい反映しているのかを検討していく。

なお，本章では，両者の引用文献の大概を把握するため，『玉塵抄』の最初の方（1 冊~5 冊）と最後の方（49 冊~55 冊）における引用文献と，それに相当する『韻府群玉』の部分における引用文献とを調査の対象とする[1]。

『玉塵抄』と『韻府群玉』とに載せられている異なり引用文献数と全引用回数を調査した結果を示すと，【表 1】のようになる[2]。

【表 1】引用文献 I

調査個所 / 全体引用文献	1 冊~5 冊		49 冊~55 冊	
	韻府群玉	玉塵抄	韻府群玉	玉塵抄
引用文献数	357	236	400	387
引用回数	1101	1215	760	1538

[1] 資料として扱った『玉塵抄』の最初の 1 冊~5 冊と最後の 49 冊~55 冊は，冊数で言うとバランスが取れていないが，丁数はそれぞれ 355，379 であり，あまり差がない。

[2] ここでは『玉塵抄』の中で，直接文献名を明記しているものだけを数えた。『韻府群玉』や『排韻』などは，その名を明記しないままその本文を引用していることが少なくないが，そのようなものは今回は調査の対象からはずした。

【表1】によると，『玉塵抄』と『韻府群玉』は両方ともそれぞれ数多くの文献を引いていること，そして，両調査個所（1冊~5冊，49冊~55冊）と，『韻府群玉』のそれに相当する部分とにおいて『玉塵抄』より『韻府群玉』の方がより数多くの文献を参照していること，しかし，引用回数においては両個所とも『韻府群玉』より『玉塵抄』の方が上にあることが分かる。このことは，『玉塵抄』は原典の『韻府群玉』の引用文献を全部用いて講述しているのではなく，『韻府群玉』の中に載せられている文献の中の，ある特定のものだけを用いていることを示している。

実際，後で述べるように，『玉塵抄』の中に見える漢籍・仏書などの引用文献においては，既に『韻府群玉』の注に見えるものをそのまま引いている場合もあれば，惟高妙安が別の文献から独自に参照・引用している所も少なくない。もちろん，逆に【表1】から知られるように，『韻府群玉』の引用文献の中には，『玉塵抄』では取り上げられていないものも少なくない。

①『韻府群玉』引用文献の引用

『玉塵抄』

筒　筒ハ竹カムリヲシタホドニ竹ノツツカ，本トミエタソ，韻府ニハ竹ノ名ナリトアリ，物ヲ入ヲツツト云ナリ，篇竹ヲ断テスルヲ云ソ，唐人ト已詩筒郵筒ヲ用―唐人ガ詩ノ筒郵ノ筒ト云ニ，筒ノ字ヲ用ルホトニ筒ヲモ篇ノ字ヲモドノ字ヲモ用ウト云心ソ，

(1巻 p.106)[3]

『韻府群玉』筒　韻会筒訓竹名篇訓断竹然唐人己用詩筒郵筒愚見二字可通用(巻1 p.7)

『古今韻会挙要』竹名(選)呉都賦竹則桂箭射筒又送韻(p.29)

---

[3]例文を挙げる場合，書体は現在通用している字体を用い，句読点は筆者が原文に従いながら適宜施した。また，返り点があるところは読み下して示してある。なお，巻数やページの数は，資料に載せた『玉塵抄』や『韻府群玉』などに従った。

これは原典の『韻府群玉』に見える「筒」という語について，『古今韻会挙要』(元・熊忠著，1297年成，以下『韻会挙要』と略称)を引用しながら簡略に説明している部分である。『玉塵抄』は『韻府群玉』の講述書であることや『韻府群玉』の該当部分に『韻会挙要』が引かれていることから，ここの講述は『韻会挙要』を直接参照したものでなく，『韻府群玉』の本文をそのまま引いたものと考えられる。

②『玉塵抄』独自の引用

『玉塵抄』又寧ト歆ト，一枚ノ席ニイテ，書ヲヨウテイタニ，ヲリフシ，軒ニノツテ，衣冠ヲカザリタ者ガ家ノマエヲトヲルヲ，歆ガ書ヲステテ，出テミタホドニ，一枚ノムシロヲ二ニキリワケテ，別々ニ坐シテ，書ヲヨウタソ，ソチハ寧ガ友デハナイト云タソ，此ノコトハ蒙求ニモアルソ，席ヲ割トアリ，名利ニフケラヌ者ソ，遼東ニ二十年マテヒツコウデイタソ，　(1巻p.16)

『韻府群玉』該当事項なし

これは『韻府群玉』には載せられていないことについての講述である。ここでは独自に『蒙求』も引いて説明を加えているが，このように，惟高妙安が独自に原典以外の文献を引いて説明をしているところも少なくない。

これまで見てきたように，『玉塵抄』中の引用文献は，『韻府群玉』からの孫引きと，『玉塵抄』独自のものとに分けられる。そして，さらに後者は，『韻府群玉』とは全然関係のないものと，『韻府群玉』の別の個所で引かれているものとに分けられる。文献数や引用回数などを数字で表すと，次の【表2】のようになる。

【表2】引用文献Ⅱ

冊 / 引用文献	1冊～5冊		49冊～55冊	
	引用文献数	引用回数	引用文献数	引用回数
『玉塵抄』独自	10	182	10	317
『韻府』からの孫引き	109	252	338	703
『韻府』のみ	117	117	39	39
『韻府』の文献を他の所で利用	47	781	50	518

上の表から，『玉塵抄』が『韻府群玉』をどのくらい反映しているのか，またそれからどのくらい離れているのかが窺われる。

『玉塵抄』が独自に引いている文献の数は両調査個所とも 10 であり，引用文献全体からみるとそれぞれ 4.23%，2.58%で，それほど多くない。しかし，それを引用した回数は，それぞれ 182 回(14.97%)，317 回（20.61%）で結構多い。例えば前者の場合，単純計算すると，一つの文献が 18 回引かれていることになる。ここに窺われるのは，数少ない文献を何度も用いているということである。また，『韻府群玉』からそのまま引いている文献の数はそれぞれ 109 (46.18%)，338 (87.3%)，引用回数は 252 回 (22.8%)，703 回 (45.7%)で，妙安が，『韻府群玉』で引用している文献を，それとは無関係のところで独自に利用しているのはそれぞれ 781 回(64.2%)，518 回(33.6%)である。結局，惟高妙安が独自に文献を用いて，講述を行なっているところは，回数で見れば，全体の，それぞれ 79.17%と 54.21%を占めるということになる。

このことから，『玉塵抄』は『韻府群玉』の講述書でありながら，『韻府群玉』の引く文献をそのまま引いて講述を行なっているというよりは，別の文献を独自に参照して講述を行なっている場合の方が多いことがわかる。

以上，今回の調査から，『玉塵抄』は原典『韻府群玉』を単に講述しているものではなく，独自にしかも積極的に，『韻府群玉』の当該個所以外のところ（の引用文献）を参照したり，そのほか多様な文献を引いたりして講述を行なっていることが明らかとなった。

3.　引用文献の内訳

本節では，『玉塵抄』と『韻府群玉』の引用文献の調査の結果に基づきながら，両書を通して合わせて２回以上引かれている文献を取り上げて[5]，その内訳を文献の種類から検討し，両書の性格の一面と惟高妙安が関心を寄せた文献の特徴を把握する。

3.1　引用文献の内訳

『玉塵抄』の１冊～5 冊，49 冊～55 冊と，それぞれに当たる『韻府群玉』の各部分の引用文献を漢籍，仏書，国書に分け，そしてさらに漢籍は経部，史部，子部，集部に分けると，その結果は【表３】のようになる。

【表３】『玉塵抄』『韻府群玉』引用文献の内訳

文献名		韻府	玉塵抄	文献名		韻府	玉塵抄	文献名		韻府	玉塵抄
漢籍経部30	毛詩	95	135	漢籍経部	事文類聚	0	8	漢籍子部11	荀子	9	13
	孟子	67	62		礼部韻略	0	2		列子	9	8
	左伝	53	76		合計	442 (36.3%)	645 (35.9%)		老子経	3	6
	尚書	49	80	漢籍史部22	史記	67	77		孫子	3	1
	説文	27	2		漢書	14	56		博物志	2	1
	爾雅	24	26		相如伝	10	9		会要	1	5
	論語	22	26		伝燈録	9	11		排韻	0	260
	禮記	20	35		山海経	5	4		韻府群玉	—	54
	周易	15	14		神仙伝	5	3		蒙求	0	16
	黄庭経	10	7		梅福伝	4	6		合計	77 (6.33%)	364 (20.3%)
	孟郊	8	6		列仙伝	4	5		坡詩	134	123

[5]『玉塵抄』１巻(1 冊～5 冊)と１０巻(49 冊～55 冊)での引用文献の全引用回数は 1792 であり，それに当たる『韻府群玉』の部分における引用文献の全引用回数は 1215 である。

	揚子	6	8		楚辞	4	5	漢籍集部 11	山谷詩	75	61
	抱朴子	6	6		晋書	3	35		杜甫	63	60
	家語	6	6		唐書	3	46		韓文	52	64
	曲礼	4	6		後漢書	3	25		文選	28	30
	周礼	4	5		南史	3	16		柳文	25	25
	細辯詩經	4	4		北史	3	5		李白	21	19
	中庸	4	3		通鑑	2	6		欧陽文	19	17
	韻会挙要	3	125		語録	2	2		淮南子	16	11
	進学解	3	3		搜神記	2	1		李賀	10	7
	廣韻	2	38		三国志	1	9		阿房宮賦	8	8
	孔子	2	11		遣史	1	4		合計	451 (37.1%)	425 (23.7%)
	呂氏春秋	2	3		循史伝	1	2	仏書 4	法華経	3	11
	国語	2	3		随史	1	2		華厳経	3	8
	月令	2	2		唐余録	0	2		般若経	1	1
	太玄経	1	2		合計	237 (19.5%)	331 (18.4%)		観音経	1	1
	急就	1	2		本草	32	20		合計	8 (0.65%)	21 (1.17%)
	玉篇	0	19		荘子	18	28	国書 1	聚分韻略	0	6 (0.39%)

【表3】には，『韻府群玉』と『玉塵抄』双方を通して2回以上引かれている引用文献だけを取り上げたが，この表によって，引用文献における両書の性格そして惟高妙安が関心を寄せた文献の大概を窺うことができる。

両書とも経部(36.3%，35.9%)，集部(37.1%，23.7%)，史部(19.5%，18.4%)などが多い。

また，引用回数はともかくとして，両書で引かれている文献も共通している場合がほとんどである。これは『韻府群玉』に引かれている文献が，多くは『玉塵抄』でもそのまま引かれていることによる。両書で頻繁に引かれている文献の場合，概して『韻府群玉』より『玉塵抄』での引用回数の方が多いが，これは惟高妙安が，『韻府群玉』の注で引いている文献を『玉塵抄』のそれに当たる個所でそのまま引いて用いているだけでなく，その文献を『韻府群玉』のその個所とは無関係のところでも利用していることを反映している。また，『玉塵抄』独自の引用文献もあるが，これは，妙安が必要に応じて，『韻府群玉』に引かれていない他の文献も引いて『韻府群玉』では触れていないことについて講述

していることを示している。

3.2　『韻府群玉』の引用文献

本節では，上記『韻府群玉』の引用文献の調査の結果に基づき，『韻府群玉』の性格や『韻府群玉』が講述された理由について考えてみる。

『韻府群玉』は前節でも指摘したように，様々な文献を引いているが，その内のほとんどは漢籍である。そして，漢籍の中で最も引用回数が多いのは集部のものであり，全体の中で，451 回，37.1%を占めている。さらに，引用回数が最も多い文献というと，それもまた集部の『東坡詩』で，134 回引かれている。また，その他，集部において引用回数が多いのも，『山谷詩』『杜甫』『韓文』などの漢詩文で，それぞれ 75 回，63 回，52 回引かれている。

一方，【表 3】を利用して『韻府群玉』と『玉塵抄』との文献引用回数を比べてみると，各部また各文献について多くの場合，『韻府群玉』の引用回数よりは『玉塵抄』の引用回数の方が多いのに対して，漢籍の集部だけは『玉塵抄』での引用回数より『韻府群玉』の引用回数の方が多いことが分かる。さらに細かく，例えば両書のうちのどちらかで 20 回以上引かれている文献について，どちらの書における引用回数の方が多いのかを調べてみると，次のようになる。

【表 4】

	20 回 以上引用	韻府 多数	玉塵 多数	両書 同数
経部	9	1	8	
史部	5	0	5	
子部	4	1	3	
集部	7	4	2	1

20回以上引用されている文献に限ってみても，経部，史部，子部は『玉塵抄』での引用回数の方が多いのに対して，一つ集部だけは，『韻府群玉』での引用回数が多いことがわかる。なお，集部文献の漢詩文は，韻書の本来の用途である「作詞・作文」の実例として用いられていることを指摘しておきたい。

これらの事実は，『韻府群玉』が基本的には作詩用参考書として作られた韻書であるのに対して，『玉塵抄』は『韻府群玉』を講述したものであるが，少なくとも『韻府群玉』ほどには作詩に役立つことを考慮していないものであることを示している。

さて，集部の次に『韻府群玉』での引用文献の数が多いのは経部である。451回で36.3%を占めている。その中でよく引かれているのは『毛詩』(95回)，『孟子』(67回)，『左伝』(53回)，『尚書』(49回)などである。

その他，漢籍の史部(19.5%)，子部(6.3%)などもよく利用されている。史部の中では『史記』(67回)，子部の中では『本草』(32回)がよく利用されている。

これまで『韻府群玉』の引用文献の内訳を一通り見てきたが，『韻府群玉』は元々の形は韻書でありながら，漢字音と関わりのある文献は経部に属する『韻会挙要』と『廣韻』をそれぞれ3回，2回利用しているだけである。ほとんど用いていないのと同じである。この点は注意すべきである。

また，『韻府群玉』は文字を韻によって排列した韻書ではあるが，上に見てきたように多様な文献を用いて事物の説明に重きをおいているところが多い。このことは，『韻府群玉』が韻書というよりは類書的な性格の方が強いことを示している[6]。そして，このような傾向は，中世以来，日本の学問の場における中国の韻書としては『韻会挙要』が重視されている[7]中で，惟高妙安が『韻会挙要』ではなく『韻府群玉』を講述の対象として選んだ理由

---

[6]これについては，柳田(1975,p.147～148)にも同様の指摘がある。

[7]中澤信幸(1999a)は，江戸期初期の＜法華経字音学＞で，韻書として『韻会挙要』が最も多く利用されていたことを指摘し，中世以来，日本の学問の場においては『韻会挙要』

の一つを示唆しているのではないか，つまり，『韻府群玉』は韻書としての性格に加えて，百科全書的な性格も持っていた。したがって，漢字や漢文などを習得することからはじめて，百科全書的な知識・教養を身につけようとしていた，その当時の五山僧や知識人達にとって，きわめて都合のいい文献であったに違いない。妙安はそこに着目して『韻府群玉』の講述をしたのではないかと考えられる。

3.3　『玉塵抄』の引用文献

本節では，前節の【表3】から，『玉塵抄』の中で，当時惟高妙安が関心を寄せていた文献を，時には『韻府群玉』における引用文献と比べながら明らかにし，そして，その結果を踏まえて『玉塵抄』の性格の一面を把握する。

3.3.1　経部

惟高妙安が独自に関心を寄せていた引用文献は何かというと，前に述べたように漢籍の経部の場合，それは『毛詩』(132回)『尚書』(80回)『左伝』(76回)『孟子』(62回)などである。

『毛詩』註魚蟲…毛詩ニ大雅小雅ト云コトアリ，雅ハタタシイ方ヲホメタソ，タタシイコトノスクレタヲ大一ト云イ大スクレニナイヲ小一ト云ソ，　(1巻p.194)

『尚書』尚書兎貢篇ニ，東シテトミナコエニソ，東スト音ニヨムソ，星有リ，皆北ニ拱(クンタク)ス，水ノ東ニ朝セ不ルハ无シト古句アリ，録ニ此ノ句ヲ多ウ云タソ，定(ツ)タ心ソ，本分ノ上ヲ云ソ，天上ノ星ハイク千万数モナウ多レドモ，コトコト北斗ノ星カ北

が重視されていたと述べている。

ノ方ニ，イラルルソ，　(1巻 p.6)

『左伝』左伝ニモ譚ノコトアリ，左伝一部ハ魯ノ君十二人ノアイダノコトヲシルイタソ，二百四十二年ノ間ノコトヲノセタソ，　(1巻 p.11)

『孟子』同一喜ビ人与ト同クハ孟子ニアリ，ヨロコブ時ハ人ト同ヤウニ喜ソ，人ノヨロコブ時ハ喜ヒ人ノカナシム時ハトモニカナシムコトソ，君子ハカウソ，　(1巻 p.57～58)

これら経部の『毛詩』『尚書』『左伝』『孟子』は，当時五山の中で，禅僧の基礎教養として広く読まれていたと芳賀幸四郎(1981)は指摘している。芳賀(1981)は，室町期禅僧が基礎教養のために読むべき第一の文献としては，儒教の経典が取り上げられていたこと，その中でも『毛詩』『尚書』『左伝』『孟子』がよく読まれていたこと，また五山叢林の儒学が著しく四書中心主義，それももっぱら新註主義に傾いたことなどを述べている。このことから，惟高妙安の『玉塵抄』の中で，普段教養として読んでいた『毛詩』『尚書』『左伝』『孟子』がよく引かれていることは，当時としてはごく自然なことであったと推定される。

3.3.2　史部

史部の『史記』『漢書』『唐書』『後漢書』『晋書』『南史』なども，妙安が関心を寄せていた文献として挙げることができる。史部の中で惟高妙安が特に多く引いている史書は，『史記』と『漢書』で，それぞれ77回，56回も引かれている[7]。

『史記』史記ニ趙ノ世家ニアリ，世家ノコトヲシルイタ書史記ニ三十巻アリ，史漢ノ本

[7]これに関連し，芳賀幸四郎(1981)は，『史記』・『漢書』については，桃源のいわゆる史記家・漢書家と称するものが出来，それが史記においては牧中・桃源・季玉と伝わり，漢書においては大缶・竺雲と相承されたと述べている。

ニタイシテハ世家トヨムソ，ソラニ泛々ニ云時ハセイケトヨムソ，此ノヤウナコトモ文字ヲアツカウ人ノ上ノ心エコトソ，ナニモカモ一ツニ云エハヲカシイソ，　(10巻 p.192)

『史記』は，日本で紀伝道の古典として重んじられ，中古以来，知識階層の間で広く読まれていた。室町期当時においても，『史記』に対する五山叢林の関心が高かったことは，桃源瑞仙の『史記抄』が講述されていることからもわかる。

また，『詩学大成抄』の中でも，惟高妙安が『史記』の講義を先学の月舟寿桂(1533)から受けていることが述べられている[8]。

『漢書』乃朗ノ切ソ，乃一ノ時ハダウ音ソ，乃一ノ時ハナウソ，乃公ト漢書ニアリ，乃トヨムソ，乃祖乃父ト僧家ニ吾カヲウヂ師ヲヤノ師ヲ云ソ，禅話ニハカウソ，物ノ本デハ乃ハダイトヨムソ，　(1巻 p.37)

『漢書』にも抄物がある。ここに見られるように，この文献も，五山の禅僧が特に強く関心を寄せた史書である。惟高妙安は，景徐から『漢書』を学んでおり，『玉塵抄』と『詩学大成抄』にはその景徐の説が多く引かれている[9]。ここから惟高の説明の一部は，景徐の漢書の講義に基づくものであることを確認することができる。なお，例文に見られる『史

---

[8]月舟の『史記』の講義によると見られる説明が，次のように『詩学大成抄』中にある。

ソレヲ相ト云ナリ，相不ト史記ニアルソ，月舟ノ史記ノ談義ニハキウタセストヨメタソ，ウタトヨメタソ，　(詩学大成抄下巻 p.253)

[9]惟高妙安が，景徐から『漢書』を学んでいたことは，『玉塵抄』の次の記事から分かる。

準ハハナノコトソ，準ハシユントハツネノ音ソ，セツ音ヲメツラシウ付タソ，史漢テハメツラシイ音ヲヲホユルト景徐漢書ノ講ニアツタソ，　(8巻 p.470)

記』『漢書』『後漢書』などは，漢字の字音にかかわる説明に際しても用いられている点に注意しておきたい。

その他，惟高妙安が関心を寄せた史書には，『唐書』『晋書』などの略史類もある。

『唐書』鴛飛鴻　盧郎ハ盧鴻カコトナリ，唐書ノ隠逸伝ニ盧鴻字ハ顥然崇山ニ隠居ス，玄宗礼物ヲソナエヲシテメセドモ辞シテ山エ帰タソ，　(1巻 p.445)

『晋書』晋書ノ列傳ノ四ノマキニ羊祜ガ傳アリ，ソノ傳ニアルソ，　(1巻 p.130)

3.3.3　子部

漢籍子部では『排韻』(260 回)，『韻府群玉』(54 回)が非常に多く利用されている。ここで特に注目されるのは，『韻府群玉』には引かれていない『排韻』が，『玉塵抄』の中では，最も多く利用されていることである。

『排韻』墻東一ハ，世ヲ避墻東王君公ト云タハフタン墻ノ東ノ方ニイタホトニ云タカソ，墻ハタカ家ニモアルガコクウナコトソ，漢ノ隠者ノ王應仲トシタソ，ホメテ云タ心カ，王君公ニ比シテ云タ心ソ，逢萌カ伝ノ語ナリ，前漢ノ末ノ王莽カ時ニ无道ナ世ニツカワレゴトモナイト云テ，ヒツコウタヲ，ホメテ云タコトソ，隠士ノ王應仲ヲ王君公ト云タ心ソ，排韻ニモミエヌソ，イツレニ墻ノ王ナドハ，面白モナイコトソ，　(1巻 p.13)

『排韻』は，『排韻増広事類氏族大全』である。簡便な人名辞典として当時よく利用されていた。柳田(1975)は，次のような指摘をしている。

『排韻』は桃源瑞仙の『史記抄』に「氏族大全」として引かれているのをはじめ，

建仁寺両足院蔵『三体詩法抄』，京都大学清家文庫蔵林宗二聞書『三略口義』，足利学校遺跡図書館月舟寿桂抄『蒲室集抄』，同抄『続錦繡段抄』，『蕉窓夜話』等々に利用されている。『玉塵抄』の中では「排院」と明示しているところもあるが，示さずに利用している場合も少なくない。

『玉塵抄』でも，人名について述べたところで，『排韻』がよく用いられている。『玉塵抄』全巻を通じて，実に1010回も用いられている。

さらに注目すべきは，先に述べたように，『韻府群玉』のある箇所で取り上げられている漢字や漢語について講述する時に，惟高妙安は『韻府群玉』の中のまったく別の個所をよく利用していることである。

『韻府群玉』瑟工　瑟雖工如王不好何一韻府質韻ノ瑟ノ所ニアリ，　(1巻 p.378)

「工韻」の「工」を下字とする二字熟語の上字「瑟」の説明をするのに，『韻府群玉』「質韻」の「瑟」の注を利用している。なお，『韻府群玉』からの引用ということを示さずに利用している場合ももちろん少なくない。

ちなみに，前節でも指摘したように，『蒙求』も『韻府群玉』では引いていない，惟高妙安が独自に利用している文献の一つである。

『蒙求』易東一丁寛カ易ヲ，田何ト云者ニ伝テ，モドツタレハ，易ガ東エイタト云タト，同心ソ，易東ノコトハ蒙求ニアルソ，　(1巻 p.8)

『蒙求』は八世紀中ごろ唐の李瀚が編集した教科書である。中国の著名な人物について述べた，漢字4字から成る句569を，内容や韻律などによって諳誦しやすいように，また故事を無理なく学べるように，二句ずつ対にして並べてある。『蒙求』は初学者向けの教科

書だったので，中国で作られた本格的な韻書である『韻府群玉』では参照されなかったのかもしれない。日本には九世紀後半には伝来していたとみられるが，「勧学院のすずめは蒙求をさえずる」という諺ができるほど，もっとも広く流布した中国文献の一つとなった。このことから，『玉塵抄』でもしばしば用いられているのでないかと考えられる。

3.3.4　集部

『玉塵抄』では，『韻府群玉』と同様，漢籍集部の文献もよく用いられている。集部の場合，『東坡詩』(123回)『韓文』(64回)『山谷詩』(61回)『杜甫』(60回)などの詩集が多く用いられている。ただし，その多くは『韻府群玉』からそのまま引いたものであり，しかも，『韓文』の他には，全引用回数は『韻府群玉』よりもやや少ない。これは，『韻府群玉』には集部が多く引かれているので，惟高妙安は集部の文献を独自に取り上げなくてよかったこと，当然，『韻府群玉』とは無関係に独自に集部の文献を用いることもあまりなかったことによるのでないかと思われる。

『東坡詩』坡詩ヤラニ夜雨ニ春韭ヲ剪(キル)トアリ，春ノ物トキコエタソ，秋ノ末ニハヲソウデクル菘ガアルソ，　(1巻 p.217)

『韓文』韓文 兇邪ヲ抜去(サク)，兇ハ憂ナリ，ウレイ又ハ邪悪ナコトドモヲヒキヌイテステタ心ソ，　(1巻 p.622)

『山谷』谷カ詩ニ十字籠餅ヲ供ストアリ，ムシモチソ，ヨウムシテ餅ノカシラガ十文字ニワルルホドムスソ，景徐ノ山谷ノ講ニキイタソ，　(1巻 p.477～488)

『杜甫』文武四一文武ノ才ノ人カ四方ニアマタアル心カ，杜詩ニ早充観国賓一観上国光ヲミルト云コトアリ，　(1巻 p.340)

詩に関連して，芳賀(1981)は，当時五山の間に高い評価をかちえてきたのは，唐代では

杜甫・李白であり，宋代では蘇東坡と黄山谷とであったと述べている。

なお，『玉塵抄』の中でも，惟高妙安が景徐から山谷詩の講義を受けていることが述べられている[10]。

3.3.5 まとめ

前節で見た通り，『韻府群玉』でも用いられているが，『玉塵抄』で特によく引かれている文献は『毛詩』『尚書』『史記』『漢書』『唐書』『韻会挙要』『廣韻』などである。

また，惟高妙安独自の引用文献，つまり『玉塵抄』1冊～5冊，49冊～55冊の両方で用いられているが『韻府群玉』には引かれていない文献は，『玉篇』『事文類聚』『排韻』『韻府群玉』『蒙求』『礼部韻略』『聚分韻略』などである。

惟高妙安が直接間接に用いた中国文献や国書の中で，『毛詩』『尚書』『左伝』『史記』『漢書』などは当時，講述の対象にされるほど，学問にたずさわる人々に関心を寄せられていた漢籍である。これに対して，惟高妙安が独自に関心を寄せていたと見られる文献は，『玉篇』『韻会挙要』『事文類聚』『排韻』『韻府群玉』『蒙求』『礼部韻略』『聚分韻略』などである。つまり字書や韻書が中心になっている。この事実や3.3.2で述べたように，『史記』なども字音の講述に用いられていることなどから，惟高妙安が中国の韻書『韻府群玉』を講述した目的は，『韻府群玉』それ自体を，『韻府群玉』に従いながら，また，日本の学問の世界で人々の関心を広く集めている漢籍を利用しながら講述するということだけでなく，自分の関心にしたがって韻書や字書を用いて，漢字や漢字音について講述を加えるこ

---

[10]惟高妙安が，景徐から山谷を学んでいたことは，『玉塵抄』の次の記事から分かる。

谷ガ詩ニ身ハ朝露ノ如（ミナ）牢強（ラウキヤウ）无（ヒ）トアリ，牢―ハカタイコトソ，カタウツヲウハナイソ，遺教経ニモ此ノタトエアルカ，牢強ノ字ハアルソ，経デハラウガウトヨムソ，景徐ノ山谷ノ談ニラウキヤウトヨマシマシタソ，詩文テハ強（キヤウ）トヨムガヨイカソ，　(3巻 p.269)

とにもあったと考えられる。

以下，『玉塵抄』の中で，漢字研究のために利用されている引用文献について，その利用実態などを具体的に検討してみる。

4.　漢字・漢字音研究

『玉篇』『広韻』などのように，漢字研究と関わりのある字書や韻書がどのくらい利用されているのか，引用文献の中で字書や韻書がどのような位置を占めているのかを見ると，以下のようになる。

『玉塵抄』の全引用回数 1792 の中で，漢字研究のための字書や韻書の引用回数は 540 回，全引用文献における使用率は約 30.1%である。韻書だけの引用回数は 242 回で，13.5%である。これに対して，『韻府群玉』の場合，もともと韻書でありながら漢字音と関わりのある引用文献は『韻会挙要』と『廣韻』がそれぞれ 3 回，2 回利用されているのみである。

このような韻書の引用回数から，『玉塵抄』の中で，惟高妙安は『韻府群玉』にはあまり引かれていない『広韻』『韻会挙要』『玉篇』『礼部韻略』『聚分韻略』などの韻書を積極的に用いて，漢字研究そして漢字音研究を行なっていたことが明らかとなる。この点において，『玉塵抄』は，『韻府群玉』と対照的である。

惟高妙安は『玉塵抄』の中で，漢字研究のため，字書としては中国古代辞書の一つである『玉篇』(19 回)，中国古代の訓詁辞書としては最古のものである『爾雅』(26 回)，中国の漢代の万物の名，及び人の姓字を列叙して解釈を加えている字書である『急就』(2 回)などを利用している。

『玉篇』挨ハモムヤウニ心ユルソ，<u>玉篇</u>ニノセタソ，奴和奴回ノ二ノ切ヲ付タソ，ヨウモカエラヌソ，タ・タイトカエラウカ，撃也トアリ，ウツトヨマセタソ，(10 巻 p.130)

『爾雅』活東―ハ科斗―ナリ，カルイ子ノコトソ，<u>爾雅</u>ノ本ニハ魚ノ部ニ，ノセタソ，虫

ノ類テ，アリサウナゾ，蝦蟇ノ子ノコトソ，此ハ皆ヘンニ虫ヲカイタソ，ナリモ虫ノツレサウナソ，サレトモカウムリハ，虫ノツレテハ，ナサウナ者ナレトモ，蝙蝠ト皆虫ヘンニカクホトニソ，爾雅ニ科―活―ト四字，ツツケテアリ，ココモ爾雅ヲソノ如ニノセタソ，　(1巻 p.8～9)

『急就』急就ノ章ニ欵東ト曰フ，亦欵凍曰其ノ寒ヲ凌生スルヲ以テナリ―，急就ハ玉海ノ書ノ目録外ト云部ノウチニアリ，款東ハ此モクワトノ心カ，クワンノ末ノハヌルカナヲ，ノケタカ，東モトウノ，下ナウノカナヲ，ノケテ，クワトノ心カ，下ノ欵凍モ同心デアラウソ，欵凍ハ寒ヲシノイデ，生スルホトニ，コヲリヲ欵テ生シテ，出ル心カ，凍ノ字ノ心ヲシタソ，　(1巻 p.9)

また，韻書としては『韻府群玉』『韻会挙要』『広韻』『礼部韻略』などを利用している。

『韻府群玉』瀼西瀼東　廣ノ時ニ瀼州ト云州ヲヲカレタソ，廣州ハ南方ナリ，此ノ韻府ニハ，曩ノ音ヲ付タリ　(1巻 p.37)

『韻会挙要』鬻モカマビスシイトヨムソ，ゲウトニゴツテヨムソ，韻会ニハスンタ音ニシタソ，鬻々トタタウテシタソ，ツヲウカシマシイ心ソ，　(10巻 p.349)

『広韻』蝃ハ広韻ニ入声ノ薛ノ韻ニセツ音ニシタソ，　(1巻 p.454)

『礼部韻略』寠ハ礼部韻ニクボニアリ，クノ音ニシタソ，字ノ注ハナイソ，　(10巻 p.276)

一方，『玉塵抄』では，たった一文献だけであるが，国書まで用いている[11]。

---

[11]柳田(1975)は，『詩学大成抄』には日本の辞書として『下学集』が見えると指摘している。

下学集ニハ別都々宜寿トカイタソ，冥途エイテナニトアツタナドト云コトヲシタソ，十王経ヤラヲヒライタソ，　(四24オ2)

『聚分韻略』摻ノ字韻書ニナイソ，聚分ノ去声ノカンガンノ韻ニ入タソ，　　(10巻 p.604)

『聚分韻略』は，五山僧虎関師錬(1278～1346)の撰述になるもので，中近世においてもっともよく用いられた韻書の一つである。

これらの例などから，主に漢字の字義や字体の研究では『爾雅』『急就』などが，漢字音そのものの研究では『広韻』『韻会挙要』『聚分韻略』『韻府群玉』『礼部韻略』『玉篇』などが，それぞれ利用されていたのがわかる。

以上を踏まえると，惟高妙安は，『韻府群玉』はもともと類書的性格をもっているとはいえ，やはりその基本的な性格は漢字を取り扱う韻書であることから，『韻府群玉』を講述する際には『韻府群玉』その他の韻書も積極的に用いて漢字研究，漢字音研究を熱心に行なったものと考えられる。

5.　まとめ

これまで，『玉塵抄』と原典である『韻府群玉』の引用文献を比較することによって，『玉塵抄』と『韻府群玉』の性格を浮き彫りにし，そして，惟高妙安が『韻府群玉』のどのような引用文献に関心をよせていたか，どのような立場に立って『玉塵抄』の講述を行なっていたのかなどを明らかにしてきた。検討の結果は以下の通りである。

『韻府群玉』は文字を韻によって排列した韻書ではあるが，一方では，多様な文献を用いて積極的に事物の分類を行ない，説明を加えている。その点において類書的である。また，『玉塵抄』は原典の『韻府群玉』の引用文献をそのまま引用している一方，独自に様々な文献を用いて独自に講述を行なってもいる。つまり，単なる原典講述にとどまらない，百科全書的知識を盛り込んでいる抄物である。さらに，『玉塵抄』は，『韻府群玉』があまり引いていない，もしくは全然引いていない字書や

韻書を用いて，漢字や漢字音研究を積極的に行なってもいる。

【参考文献】

小倉肇(1991)「韻書について(1)」『弘前大学教育学部紀要』66

(1992)「韻書について(2)」『弘前大学教育学部紀要』67

髙松政雄(1997)『日本漢字音論究』風間書房

中澤信幸(1999a)「一七世紀初頭における『古今韻会挙要』の受容―日遠『法華経随音句』を中心に」『愛文』34

(1999b)「江戸時代における漢字音研究の変遷―『古今韻会挙要』はなぜ使われなくなったか―」(国語学会平成 11 年度秋季大会研究発表要旨集)

沼本克明(1986)『日本漢字音の歴史』東京堂

芳賀幸四郎(1981)『芳賀幸四郎歴史論集 I　東山文化の研究(上)』思文閣出版

柳田征司(1975)『詩学大成抄の国語学的研究　研究編』清文堂

湯沢質幸(1986)『唐音の研究』勉誠社

(1996)『日本漢字音史論考』勉誠社

和島芳男(1965)『中世の儒学』吉川弘文館

【資料】

大塚光信(2000)『新抄物資料集成　玉塵』(叡山文庫本) 清文堂

大友信一・木村晟(1998)『韻府群玉』(国立公文書館内閣文庫蔵 古活字版) 大空社

元黄紹 (1990)『古今韻会挙要』中文出版社

陳彭年他(1965)『新校正切宋本広韻附索引』黎明文化事業公司

中田祝夫(1970a) 抄物大系別刊『玉塵抄』(国立国会図書館本) 勉誠社

柳田征司(1975)『詩学大成抄の国語学的研究 影印編上下』清文堂

劉克寰(1957)『玉篇』中華書局